

### 13) グズベリーとブルーベリー＝酸塊

グズベリーはユキノシタ科の落葉低木で、日本では酸塊(スグリ)と呼ばれ、長野県や山梨県の亜高山帯では野性種を見ることがもできる。この仲間は世界では約 150 種が知られ、大雑把にスグリとフサスグリに分けられている。木の高さは約 1~2m になり、よく分枝して葉腋には 3 裂した刺がある。葉は楕円形で浅く 3~5 裂し、有柄で互生する。表裏両面に短毛が散生し、縁には粗い鋸歯がある。夏、葉腋に白色で花径 2~3cm の 5 弁花を単生して垂れ下げる。果実は直径 8~10mm ほどの球形もしくは楕円形の液果で、赤褐色に熟すと甘酸っぱく、花と同様に枝に垂れ下がる。和名の由来は、果実が甘酸っぱく球形であるために名付けられた。学名は『*Ribes sinanense*』で、属名は赤色のスグリを、デンマークでは「ribes」と呼んでいるところより命名された。種小辞は「信濃の」という意味である。ただしヨーロッパ種の学名は『*Rubus grossularia*』で、この種にはヨーロッパやアメリカで改良されたものが多く、日本のスグリに比べると果実が大きい。中でもハウトンと呼ばれるものは重さが 3g にもなる。また果実の色も赤色のほかに、黄色や緑白色に熟すものもある。ドイツ大玉と呼ばれるものは重さが 8g にもなり、果実の色は緑白色である。

フサスグリの原産地はユーラシア大陸西部からアフリカで、日本には 1873 年に渡来した。和名の由来は房状に実るスグリの意で、アカブサスグリなどともいわれている。学名は『*Rubus sativum*』で、種小辞は栽培されたという意味である。冷涼地を好み、4~5 月頃に長さが 8~10cm ほどの総状花序を付けて、黄緑色の小さな 5 弁花を多数開く。7 月頃径 6~8mm ほどの赤い実が熟し、よく目立つ。このため最近では鑑賞用として植えられることも多い。完熟した果実は生食する他、酒に漬け込んでスグリ酒を作ったり、未熟果を採取して塩漬けなどにする。イギリスでは『red currant』とか『wild currant』とも呼ばれており、果実は生食される他、ジュースやジャムの原料にしたり、ヨーグルトやゼリー、アイスクリームなどにも入れている。

一方ブルーベリーは北アメリカ原産のツツジ科スノキ属の低木で、20 数種が知られており、学名は『*Vaccinium*』である。高さは 1~2 m、葉は肉厚の卵形または長卵形で、多くの場合はよく紅葉し、ツツジの仲間だけあって酸性土壌を好む。このため植え付け時にはピートモスなどを施して、土壌を弱酸性化することが大切である。また根が浅いため支柱を立てることも忘れてはならない。4~5 月頃、白色の小鐘状の花を房状につけ、果実の直径は 1cm ほどの球形もしくは扁球形である。夏から秋にかけて完熟すると果実は甘酸っぱく、淡い紫から濃青色、黒紫色となり、果面には灰白色の果粉をかぶり、ジュースやタルト、パイ、ジャム、などにする。夏場の乾燥と暑さを嫌う反面、水捌けと陽当りを好むので、夏場は水やりに心がけることと日差しを調節する工夫も大切である。また他家受粉性が強いので数株育てることも重要なポイントである。これさえ守れば毎年結構な実りをプレゼントしてくれる。



フサスグリの花、4月～5月ごろ開花する。花卉に見えるのは萼片である。原産地は西ヨーロッパから西北アジアで、日本へは幕末に導入された。主に果実酒にする(長野県松本市)。



フサスグリの果実、観賞用として鉢植えにされることも多い(長野県松本市)。



ブルーベリーは北アメリカ原産のツツジ科の植物で、戦後になって日本に導入された。やや冷涼地の日当たりのよいところを好むものが多いが、暖地性の種もある(東京都小平市)。



ブルーベリーの若い果実、まだ食べられない。



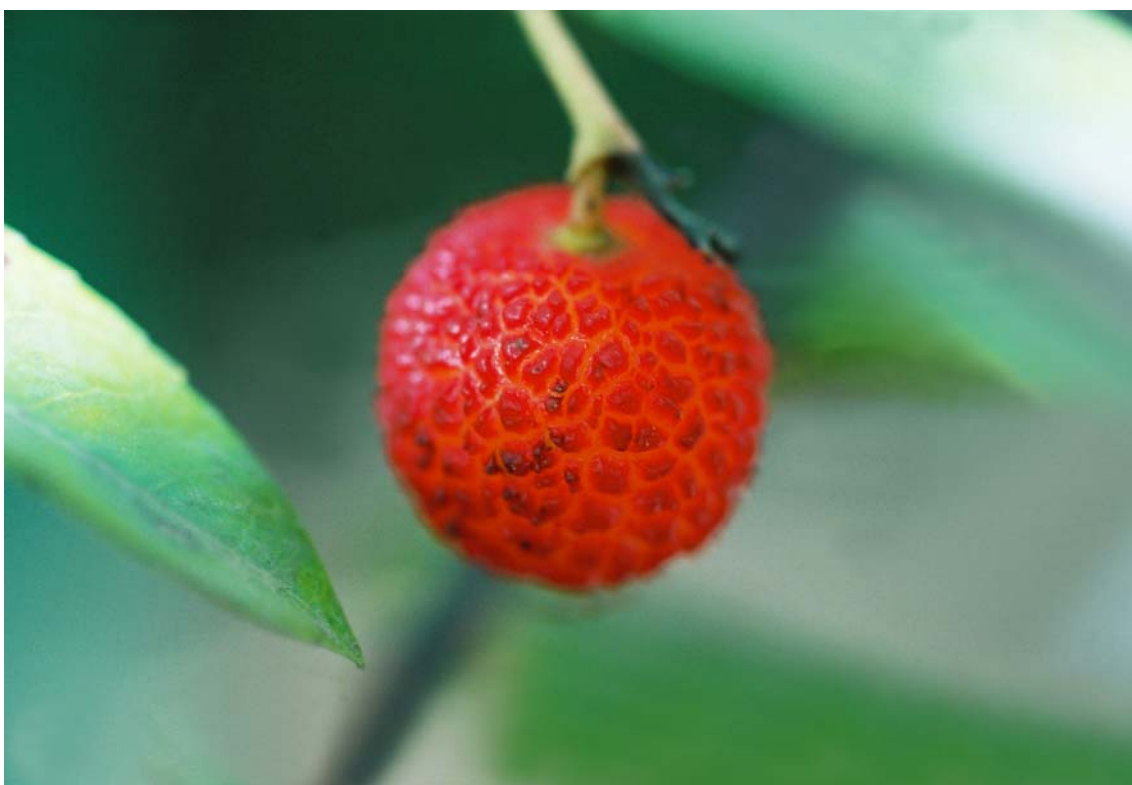
ブルーベリーは完熟すると黒くなる。やや紫色の残った果実には酸味も残るが、黒くなると酸味もなくなる。どのあたりで収穫するかは好み次第である(長野県軽井沢町)。



熟して黒紫になった果実は今が食べごろで、ほんのりと酸味がある(長野県軽井沢町)。



ブルーベリーやドウダンツツジの花によく似たイチゴの木の花。学名は『*Arbutus unedo*』で、キイチゴよりはブルーベリーに近い種で、どれもツツジの仲間である。



イチゴの木の果実はブルーベリーとは似ても似つかない。しかし観賞用として美しい。 [目次に戻る](#)